

親愛なるバルバラ・ケンヒェス博士

お返事大変興味深く拝読いたしました。

マックのサハラ・プロジェクトの詳細、そして、「デモンストレーション」についての解説をどうもありがとうございます。ゼロによる「デモンストレーション」は、パフォーマンス・アートやハプニングと比べ、作品化することへの意図は少なく、むしろ鑑賞者によって自然発生的に起きたものであるとのご説明は大変参考になりました。いっぽうでまた、「デモンストレーション」が様々なメディアで報道されることにも彼らはおそらく意識的であり、こうしたパフォーマンスティヴィティが「ゼロ」のムーブメントをさらに有名にしたという事実も興味深いですね。

「ゼロ」に関わったアーティストの身体の扱いの中では、ピエロ・マンゾーニのアイロニカルな実践がより草間に近いものであったと言えるでしょう。本展でも映像を展示したマンゾーニの《生きる彫刻》（1961年）は、台座の上のモデルに自らがサインすることで作品が成立するというパフォーマンスですが、このマンゾーニのパフォーマンスティヴィティは、過度なまでに自己顕示的な「肉体的存在」を通して、芸術的権威と制度を逆手に取りながらユーモアへと転換するものであり、草間が「自己」のプレゼンスを戦略的に使用しつつアメリカ的ポップに対抗するパフォーマンスを行ったことと類似していると考えています。

さて、これまでの往復書簡でのやりとりの中で、「ゼロ」のネットワークと草間の接点、当時新しく生まれた作品素材の使用についての類似点や相違点、それぞれのアーティストの様々な身体の用い方といった多くの要素について意見交換をしてみました。お話ししてきましたように、草間と「ゼロ」には、作品において形式的類似点をいくつか指摘できると同時に、その質的な相違点も多く浮かび上がります。あなたが何度も強調されましたように、それは「ゼロ」が、多数のアーティストや芸術的文脈の位相に関わりつつ、概観するにはあまりにも複雑なネットワークを形成したことに起因しているでしょう。アーティスト同士で共通した指示や方向性を持っているわけではないにもかかわらず、ヨーロッパ大陸における国家間の分断を超え独自の関係性を結んでいった「ゼロ」のアーティストたちは、まさに戦後の「沈黙のゾーン」から打ち上がるロケットのように、10年に満たない短期間の中であらゆる実験を試していきました。一方、同時期に草間は、幼少期から続く「無限」に増

殖する幻覚ヴィジョンに抵抗し、その中で自己を「ゼロ=無」へと消滅させていく方法論を、自らの芸術の基礎として確立していきました。

当館で開催された「Zero Is Infinity」展は、「ゼロ」と「無限」の概念を行き来するこの双方向のベクトルに着目したものです。この2つの概念は、対立関係にあるというよりはむしろ対のようなものとして理解されるべきではないでしょうか。幼少時代に悲惨な戦争を体験した作家たちは、戦後復興の中で旅行が解禁され、少しずつ自由になるにつれて、国境を越えたコミュニケーションを取れるようになりました。個々の実践には多くの違いがあるものの、その中で未来への希望を真摯に見つめ、60年代という激しい時代を駆け抜ける作家たちが前衛芸術を通して生み出した双子のような創造力が、この「ゼロ」と「無限」であると言えるのではないのでしょうか。

今日、グローバル情報資本主義下により経済格差が拡大していく中、難民問題を契機としたナショナリズムの再燃やポピュリズムの台頭、ブレグジット問題など、ヨーロッパは様々なレベルの流動と分断に再び向き合い始めていると思います。また、いうまでもないことですが、本展の開催とほぼ同時期に起こった COVID-19 によるグローバル・パンデミックは、ヨーロッパのみならず全世界的なペシミズムや排他的な態度をより決定的に推し進めてしまいました。そして御存知の通り、残念ながら、本展は開催期間の大部分を休館とする判断を余儀なくされました。しかし、草間や「ゼロ」の作家たちによる国境の分断を乗り越えたネットワークを生み出す強力なエネルギー、あるいはピーネが述べたような「ゼロという態度」には、いまの私たちにとっても学べるものが多くあるのではないのでしょうか。草間は、現在の状況下に対して自らメッセージを発し、COVID-19 の未曾有の脅威に対して、人類愛による共闘を呼びかけていますが、このような状況下において、「ゼロ」を振り返ることの意義について、なにかお考えのことがあれば最後にお聞かせいただければと思います。

黒沢聖覇

2020年10月2日



黒沢聖覇 様

お手紙の中で、コロナ・パンデミックに伴う危険についてご指摘がありましたね。世界中の人々は現在、地元や地域の存在をますます意識しています。そして、国内の医療システムを確保するため、各国は政治的国境を再形成しています。ドイツでは、連邦主義に基づいた最小の行政単位となる州のシステムが登場し、これらの行政はそれぞれ全く異なる感染拡大防止対策を講じています。人々は不安定な状況に晒されており、今秋には新たな感染者数の増加が確認されています。政治家たちは（今もなお）自宅待機を呼びかけ、もちろん一人でいることが好ましいとしています。隔離や境界といったシナリオは、私たちが人間としてこれまで社会的に培ってきた全てに矛盾します。アリストテレスは、人間は社会的動物（zōon politikon：ポリス的な動物）であると説いています。人間には、他の人々との接触やコミュニケーションが必要なのです。

コロナ危機或いはウィルスは、これまでのそういった社会的な自己定義を揺るがしています。人間は、人間自身に注意しなければなりません。なぜなら人間同士の接触がさらなるウィルスの増殖に繋がるからです。

新型コロナウイルスに対し、私たちはどのように反応することができるのでしょうか。芸術は私たちを助けてくれるのでしょうか。現在、口と鼻を保護しながらマスク越しにのみ芸術に感動することが許されています。そして多くの美術館や展示ギャラリーは臨時休館となり、内覧会では人々は覆われた顔で接しています。

それぞれが異なり多様な「ゼロ」の芸術に夢中になる理由はたくさんありますが、そのなかでも特に二つの特徴が際立っています。

はじめに、私は「ゼロ」の無限のオプティミズムを尊敬しています。雑誌『ZERO 3』では、マックとピーネは、「私たちは生きる。私たちは全てのためにある」と言及しています。戦時中に青年期を過ごしたこの世代は、とりわけ暗く、危険でトラウマ的な月日を経たあとでこの

『ZERO 3』が1961年に刊行されたとき、新鮮なまでに楽観的な自信を感じたのです。彼らは最悪のときを生き延び、だからこそ、それから起こる全てがより良くならなければなりませんでした。

第二に、「ゼロ」は自然の美、空の広大さ、光の輝き、運動のダイナミズムを称賛しました。戦禍において自然は平和の味方でした。しかしその一方で近年は、破壊的な力を孕んだ別の一面を私たちに見せています。洪水、干ばつまたは昆虫による災害といった実例が、テクノロジーの使用で全てを成し遂げることができるというホモファベル（工作する人）の自己評価に異議を唱えています。

「ゼロ」の作家たちは、自然とその美的な素質に感謝を示しています。彼らにとって、自然は芸術と自由の貯蔵地でした。星空は無限であり、オットー・ピーネ、イヴ・クライン、バーナード・オバールタンの作品に見られように、火は変化のプロセスの中で独立した作品の形態を創り出しました。ハインツ・マックは、サハラ砂漠を彼の芸術の保全地とし、オットー・ピーネは、「環境を、単に小さな範囲ではなく、大きなスケールで変化させること」を求めました。ここでピーネは、自然を不法占拠しようとしたということではありません。他産業のように原材料を自然界から抽出しているのではなく、空気や熱、水と共に芸術を創り出しているのです。

このように、今回は上記の二点を挙げました。もちろん 50～60 年代には、私たちが現在経験しているような危険なパンデミックを誰一人として想像してはいなかったでしょう。しかしながら、「ゼロ」の芸術は、おそらく現在においても肝心で重要な二つの格言を私たちに提示しています。

自然を楽しみましょう！そして楽天的になりましょう！

私がオットー・ピーネの静かで瞑想的な光の部屋の中に座り、星のような煌めきを見るときには、絶え間ない発生数や新たな感染などを 5 分、10 分あるいは 15 分のあいだ忘れることができます。ハインツ・マックのアルミニウムとガラスの碑の光の煌めきや音の前では、氷と雪の広大な白い景色に思いを馳せることができます。また、一つの軸で際限なく回転するギュンター・ユッカーの《サンド・ミル (Sandmühle) 》の前に立つときには、幾千の砂の粒が回り続け、その単調な動きが私の目を落ち着かせます。このような計り知れない自然の持つ様々な側面は、私たちに無限と自由の感覚を与えてくれます。

初期の作品や展覧会において、マック、ピーネ、ユッカー、そしてヨーロッパの「ゼロ」のネットワークは、国、階級、そして国境を越えてたくさんの人々を引き合わせました。そして今日、「ゼロ」の芸術は、私たちに自信と美を与えることで、この世界規模のパンデミックが引き起こしている困難な局面を生き抜く手助けとなります。

黒沢聖覇さん、全ては進行しています。このパンデミックが収束したとき、かつてと同じ世界ではなくなっているでしょう。しかし、私はそれがすべての人間に開かれた世界となることを願っています。私たちに自由と健康を譲ることはできません。

この往復書簡と展覧会を通して、貴方のアイデア、知見、そしてご意見を共有いただきありがとうございました。草間彌生美術館のウェブサイトにあがっている特別展「『ゼロ』と草間彌

生」の展覧会動画は、音とイメージのコンビネーションがとても成功しており、私も気に入っています。

バルバラ・ケンヒェス

2020年10月28日